教師の願い

心のダイヤモンドが光るとき

原　一宏

子ども達と一緒に学ばさせていただき、「学校」というところが私にとりまして、すばらしい人生の道場であり、学びの場となっていることにまず感謝しております。

四十人の子ども達を見ておりますと、一人一人の持ち味が全て違い、その子らしさが教室の中で生きております。

給食中の事でした。転入してきたばかりの女の子が何かの拍子で自分の飲む牛乳をこぼしてしまいました。女の子はびっくりした様子でしばらくそこに立っていました。ところが、近くで食事をしていた五・六人の子ども達があわてることなく、ごく自然に自分のぞうきんを持ってきてふき、何事もなかったかの様にまた席に着いて食べ始めたのです。

子ども達のその何気ない姿に私は大変感動しました。そして、今子ども達はすばらしい心のダイヤモンドを光らせているなと感じたのです。

また、雨のはげしく降っている朝、女の子数人がやってきました。大変あわてている様子なので「どうしたの？」とたずねると「先生、雨が降っていてうさぎがかぜひいちゃう。授業中だけど、どうしても小屋にシートをかぶせたい。行ってもいい？」というのです。外を見ると、どしゃぶりです。子ども達の切実な、真剣なまなざしに私はすぐ「いいよ」と返事をしていました。普段、あまり自分を出さず控え目なB子が興奮ぎみに言ってきたのです。私自身が圧倒されてしまいました。B子のダイヤモンドが今輝いているなと思いました。

毎朝、教室に入って行くといつも元気に挨拶をしてくれ、教室の窓を開けてくれるH男。おかげ様でさわやかな気分で教室に入れます。

どの子も、いろいろな色のダイヤモンドの光を放っていて、教室がとても明るくなります。

私も自分のすばらしいダイヤを教室いっぱい、学校中に、日本中に、世界中に、光らせて生きていきたいと思います。

（美篤小学校教諭）